

---

# メイドさんの出番です!!

紫乃 華陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メイドさんの出番です！！

### 【Nコード】

N8818Y

### 【作者名】

紫乃 華陽

### 【あらすじ】

パン屋の娘から、急遽噂の”白い伯爵”の元で働く事となった楓。そこには、「金目狙い」などという言葉は無くして平和であった。だが、ある日の事。楓がすっかりメイドの生活に慣れて来た頃に、突然伯爵が誘拐されてしまった。いつもの根気と気合で伯爵を助けに行くと言っのだが・・・。

## メイドライフの幕開け（前書き）

少々コメディ方向へと書き換えました。台詞が多い所も有りますが、どうぞ広い心で見てください。

## メイドライフの幕開け

とある街の屋敷には、街で噂の”白い伯爵”が居たそうだ。その伯爵は未婚のため、やはり女性陣には財産を狙って働きに来る者も少なくは無い。そこでその伯爵は自ら雇用するようにし、体力、知力、忍耐力のある女性を選んだそうだ。

最近こいずみは女性、というよりは少し若い女子を雇用したらしい。名前は小泉楓かへ。出身も育ちもこの街であり、生まれ持った体力がある。

パン屋の娘からいきなりメイドにならないかとスカウトされた時は、彼女も断ろうと思っていたが親に押し切られ、噂の”白い伯爵”の屋敷の前で今現在佇んでいるのだ。

確かにパン屋よりは給料も良いとは思うが、面接も無しにメイドにならないかと言われても戸惑うのは当然である。だからと言って、折角の誘いを断るのも少し悪いと思い、本人も決意したらしい。

大きな門の右側の呼び鈴を鳴らすと、屋敷の中からは若い執事とメイド長らしき人物が現れた。二人とも二十代後半から三十代程に見える。二人は楓の前に来るとにこり微笑み、

「小泉楓さんですね？お待ちしておりました。」と執事の方が言った。

「私は篠田と申します。執事長を勤めております、よろしくお願ひ致します。」

「雪野です。メイド長を勤めております、これからよろしくお願ひしますね。」

軽い自己紹介をして二人は楓を中へと案内した。

楓は、庭に綺麗に咲き誇っている薔薇を見渡していた。ここが一般庶民とは違う所などと考えていた。その間に、無駄に大きい扉の前に到着していたのだ。

あまりの大きさに楓は目をぱちくりさせる。そんな楓を雪野は可愛いものを見るようにふふと笑いながら見ていた。

家の中も今までに見た事が無いような広さで、ここを伯爵一人が支配していると思うとどれだけ偉大だかを楓は思い知った。そのため、伯爵への挨拶へ行く途中で左右に顔を動かしてばかりいた。

「ご主人様のお部屋はずつと奥にあります。後で雪野さんが他の部屋について教えてくれると思いますので、なるべく早く慣れてくれればと思っております。」

「は、はい……。」  
自分にとっては慣れない広さだったために、心底不安も抱いていた。そんな楓の背中を雪野は軽くぽんぽんと叩いた。

「ご、ゴッドマザー……!!」

そう言いたくなったのは抑え、楓は一人で感動していた。この頃から楓にとって雪野は”神のような母親”になったのであった。

「ご主人様、楓さんをお連れしました。」

さっきまでの緊張のほぐれはまたピンと張り、中からの返事が来るのが少し怖かった。何故なら楓の脳内では、『伯爵』真面目で怖いというイメージがあったからである。だが、中からの返事は思ったよりも明るく、少し幼い高い声だった。

「どうぞ、入って下さい。」

その声を聞いた楓はホツとした。

ドアが開いて、視界に現れたのはちゃんとした青年。ブロンドの髪に白いスーツを着ていて、まるで天使を思わせるような……童顔だった。(恐らくハーフ。)

そんな伯爵を見た楓は驚いた。立った時同年位の身長ではあるのだが、顔が幼い声も幼い。イメージとは全く違ってはいたものの、全く逆の存在だったのだ。

「初めまして、私は神宮寺琥珀じんぐうじと申します。今日からよろしく、楓さん。」

そう言うてにつこり笑った。とても驚いていた楓だが、とりあえずお堅い挨拶をして琥珀の部屋から出た。

「どうでした？伯爵は。とても可愛らしい人だったでしょう？」

「こら、雪野……。」

「あら失礼。」反省の色は無く雪野はクスクスと笑っていたのだ。

挨拶した後は、篠田が言ったように雪野が部屋の案内をした。

部屋はアパート一部屋の二倍くらいで、タンスやクロゼット、バス  
タブにベッド、机などと必需品が揃っていて一人分の部屋にしては  
快適だった。

「ここが貴女の部屋です。今日のお仕事は、貴女の部屋を整理する  
事から始めましょう。」

「解りました。」

「部屋にあるものは好きに使っていいですからね。」

と言い、雪野は楓の部屋から出て行き、他のメイド達に指示を出し  
ていた。

「さて、始めますか……。」

まずは、藍色の制服（メイド服）を着て、エプロンを着けた。エプ  
ロンは現代向けなのか、フリルが付いていて可愛いデザインだ  
った。制服は古風である。カチューシャを着けたら、まずは鞆に入  
っている寝巻きや下着、念のためにある普段着をタンスの中に入れ  
た。クロゼットにはコートと今日来ていた上着と鞆を入れた。

机には、メイドのためのマニュアル本と羽ペンが乗っていた。引き  
出しには日記帳があり、『ここに本日あった事を記しておく事』と  
書いてあった。大分丁寧である。

部屋も意外と小綺麗で、掃除なんてたまにすればいい位の綺麗さで  
あった。

やる事を無くした楓は、雪野の元へ行き何かする事がないか尋ねた。  
「そうですね……。では、図書室と資料室に本を運んでいただ  
こうかしら。」

きちんとした初仕事に、楓はやる気を見せた。

「任せて下さい！……で、その本は何処にあるのですか？」

すると雪野は「ここですわ。」といい、ダンボールに詰められていた新書を楓の前へ運んでいった。

「此方は図書室。で、此方が資料室への本です。少しずつでいいので運んでいただけませんかしら？」

その本の山を見た楓はたたりと汗を流したが、初仕事で、しかも力仕事なので気合を入れ直した。

「分かりました。頑張ります!!」

そう言うと雪野は心配顔から笑顔になり、「よろしくね。」と部屋を後にした。

「うーん・・・十冊ずつ持っていけば平気かな・・・。」

両方百冊、計二百冊程ある。力仕事が得意な楓だが、流石に多量だ。持てる分だけ持って行き、図書室の本は全て片付いた。そして、資料室へ運んでいく途中だった。

「手伝いましょうか？」

後ろから声がした。横にひよこつと顔を覗かせたのは、琥珀だった。「伯爵!?だ、大丈夫です。力仕事は得意なので。それに伯爵に持たせる訳にはいきません・・・。」

と遠慮する楓に対し、

「伯爵じゃなかったらやらせてくれるの？」笑いながら、楓の後に続いた。いつの間にか敬語じゃなくなっていた。

「え、それは・・・あ、ああ!!」

バランスを倒してしまったのか、後ろに転倒しそうだった。それを、丁度後ろにいた琥珀が支えたのだ。

「大丈夫?・・・やっぱり手伝った方が良かったんじゃない?」と笑った。

「ほ、本当に大丈夫ですから!!」

と言ったが、琥珀は言う事を聞かずに半分以上の新書を持った。

「伯爵、私が雪野さんに怒られますから・・・!」

「平気だよ。僕が言っておくから。」

何を言っても手伝う気ではないので、楓は諦めてしまった。

資料室は掃除をしていないのか、埃っぽくあまり綺麗とは言えなかった。

「ここ、掃除をされていないんですね……。大丈夫なんですか？」

「いいんだ。ここは結構プライバシーに関わる場所だから、あんまり人を入れたくないんだ。」

「そうなんですか……。」

二人が新書を入れ終えた時、琥珀が言った。

「ここには、今まででは僕以外に篠田さんと雪野さんしか入れた事ないんだけど、君は雪野さんに頼まれたから特別だね。」

「そ、そうなんですか?!」

「うん。だから、今度からはここに入って来ていいからね。後、掃除も頼もつかない。」そういつて、また笑顔を見せた。

「……。いいんですか、本当に……。」

「ああ。あんまり弄らなければね。じゃ、僕はここで調べたい物があるから。」

「あ、はい。失礼しました。」

楓は納得がいかなかった。琥珀と雪野と篠田しか入れた事の無い資料室に、何故自分だけ入れたのが疑問に思った。だが、何もわかりそうにないのでとりあえず、その問題は放置した。

その事に深入りするのもしけない気がしたため、他はもう聞かない事にした。

「雪野さん。終わりました。」

「早いですね。ずるでもしましたか？」

その笑顔が恐ろしい。

「い、いいえ、色々やり方を考えながらやっていたもので……。と楓は苦笑するしかなかった。

流石に、伯爵に手伝ってもらったなどと言う訳にもいかない。本当は処罰をうけなければいけないはずだったが、思わぬ結果になっってしまった事を楓はそこで後悔した。

「後はもう無いと思います。他のメイド達にもう色々やっていたので、後は皆さんと一緒に食堂へ行って下さい。」

「分かりました。」

食堂は長い廊下を渡った先にあり、雇われているメイドは少数なのに食堂は広いのだ。楓が恐る恐る中に入ってみると、中には十五人中八人程のメイドがもう先に座っていた。

「あ！新人さんだ！」

一番最初に反応したのは身長の小さいメイドだった。

「楓ちゃんって言うんだよね？私は優奈ゆなっていうの。よろしくね。」と笑って見せた。

「よ、よろしく……。」

「こら、新人さんを困らせちゃ駄目でしょ？」

次に近づいてきたのは眼鏡の三つ編みの女の子だった。

「私は咲さき。ごめんね、この子がいきなり……。」

「ううん、大丈夫。よろしくね。」

二人が近づいてきたからか、他のメイド達もわんやわんやと集まってきた。

明るい性格からしつかりした性格までのメイド達が自己紹介を始めてきたのだ。先程の優奈は十六で、咲は十八。大体は楓と近い年の子ばかりであった。

「ふう、終わった……。ん？」

「何々？一体何事？」

「新人だつてさ。」

最後の三人が入ってくると、楓の周りを囲んでいたメイド達は急いで自分の席へ戻った。

楓は何が何だかわからない様子だったが、とりあえずその三人にも挨拶をした。

「楓です。今日からここで働く事になりました。よろしく願います。」

目の前にいた三人は、一瞬驚いたもののすぐに笑顔になり、

「よろしく。私は副メイド長の七海<sup>ななみ</sup>。」

「私はメイドの中の幹部生って所かな？実花<sup>みか</sup>だよ。よろしくね。」

「同じく、幹部生の歩美<sup>あゆみ</sup>です。よろしく。」

食事を食べ始め、三人と慣れ親しんだ後は普通に会話をしていた。

「へえ、メイドにも位があるんだね。」

「そりゃ、メイド長とかいつかは辞めないといけないからね。その後誰になる？ってなったら困るでしょ。だから、こういう風に副メイド長、メイドの幹部みたいにしてるの。」

「だから、皆ささつと離れたんだ。」

「そういう事。でも、普通に話していいからね。分からない事があつたら何でも聞いてね？」

「ちよつと図々しいかもしれないけど、そうさせてもらっね。」

こうして、食事の時間は楽しく過ごせたのだという。

それぞれ、自室に戻ったメイド達。楓はお湯の入ったバスタブに身を沈めながらメイド達の名前を覚えていた。

「結構覚えるの大変だな……。慣れれば大丈夫だと思うけど。」

最初に来た時の不安は嘘だったのかと思う程に、次の日を楽しみにしていた。

入浴を終え、寝巻きに着替えた後は記録帳（日記帳）に出来事を書いて寝た。

『メイドライフの幕開け』という見出しから始めて……。

## メイドライフの幕開け（後書き）

少し誤字を直しました。誤字、脱字があれば言ってもらえると幸いです。

皆が鬼に見えるのは、私だけでしょうか……？

「楓ー、こつちお願いーい。」

「はいはい、只今ー!!!」

「楓ちゃん、そつち終わったらこつちお願いしていいかな？人手が足りなくて。」

「分かりました!!!これが終わったらすぐに行きますから!!!」

朝からずつとこの調子であちこちに向かう楓を見て、他のメイド達も驚いていた。実は、本日の最初の仕事により、幹部や副メイド長に見込まれたのだ。楓は女にしては力があるという事でこつなつてしまったと言つても良いだろう。

「凄いな、楓ちゃん。副メイド長達から仕事を貰ってるよ……。」

「そりゃ、朝あんな事があつたんだから当然でしょうね……あれは伝説よ。」

楓のメイド仲間である優奈と咲が忙しそうな楓を見て言う。咲の言う伝説とは、先程言つたように本日の最初の仕事とも言える事だ。

朝、メイド達が朝飯を食べ終わった時の事だった。

\*

「食器、どんどん持ってきて。」

「はい。」

食器洗いが係のメイドに頼まれて食後の食器を運んでいるのは、十五人中三人のメイド達だった。

十五人分の食器を分けて持つていけば問題はないのだが、一人の食器を持ったメイドが躓いてしまい、そのまま転倒……

「うわあ!!!……つと!!!おつとつと……。」

のつもりが近くにいた楓が皿を両手でキャッチし、転倒しそうになったメイドを足で支えてセーフ。

当然、周りからは「おおー」と声を揃えてそれと同時に拍手が巻き起こった。その後は皿も洗えて、転倒を免れたメイドは怪我無く全て無事に終わった。

\*

このような出来事があったために副メイド長に見込まれ、今に至るわけである。誰にも真似が出来るわけではないので、その力を仕事に生かせないかと次々と仕事をやらせていると言う訳だ。この出来事はその夜にメイド達の記録帳に刻まれるだろう……。

「えーと、次は庭の掃除か……はあ……。」

溜め息を吐きながらも仕事は仕事なので、楓は庭に向かった。庭の掃除は執事の篠田から教えてもらうために行くのだという。

「篠田さん？」

「楓さん。お疲れ様です。」

「あ、お早うございます。」

篠田も丁度今来ていたらしく、物置小屋から出て来た。どうやら中の騒動を知っていたらしい。

「ではまず、掃き掃除からですね。今の時期だと落ち葉がそこらに落ちていたので、それを掃いて下さい。範囲は庭内だけでいいので終わったら、私は部屋にいますので来て下さいね。」

「解りました。」

篠田は笑顔で室内に入っていく、いざ始めようと思った楓はやる前からどつと疲れていた。

屋敷の掃除もあったが、まず庭内だけと言われても、庭内が広すぎるのだ。庶民の庭の何倍もある。始めてきたときはじっくり見ているなかつたが、屋敷から出た時は門が遠く見えた。ここを一人で掃除をしろという篠田を鬼だと思いはじめた楓であった。

「気楽にやっつけてけばいいかな……。」

そう言いながら、屋敷の近くにある落ち葉から掃いていった。



が、琥珀と話す事でまた疲れが溜まっていったのだ。体力は人並み外れてはいるため、まだ少し仕事が出来そうであったがそろそろ限界に近かった。体力、精神両方ともどつと疲れて休みたいとは思っていたが、こんな事では辞めさせられてしまうと思えば少し頑張ろうと内心思っていた。

掃き掃除がやつとの事で終わった所でもう既に楓はへとへとになっていた。

伯爵は窓から姿を消し、安心してその場で眠ってしまった。

「やれやれ……。」

出かけようとしていた琥珀が羽織っていた肩掛けを楓の肩に掛けた。後ろにいた篠田は微笑み、

「琥珀様は優しいですね。」と言った。

その時、琥珀は内側の胸ポケットに入れていた紙を起こさないように楓に持たせた。

「そういう風に見える？」

笑いながら言う琥珀に、篠田は苦笑した。「行きましようか。」といい、門の近くでそのまま寝かせた。

出かける先は、毎度行っている家具屋だった。今の時点で家具が物足りないと思ったら、良い品が売っている家具屋『Gracious』に行っているのだという。

琥珀のセンスは疑うまでも無く良い。屋敷のデザインを考えたのは琥珀の父である夕白<sup>ゆうはく</sup>だ。中身は夕白に似たらしい。母親のライラは夕白が日本で見つけたフランス人の美女であり、琥珀の容姿はライラ似である。その二人は琥珀が五歳の時に交通事故で亡くなってしまった。一人になってしまった琥珀は前にいたメイド達や執事に可愛がられて育った。そのメイド達の中には現在メイド長である雪野もいたのだ。

雪野はメイドと言うよりも、琥珀の姉であり遊び相手だったと言ってもいいだろう。小さい頃はとても仲良く遊んでいた。

そして、篠田は前の執事の息子である。初めて来たのは琥珀が十歳の時、篠田が今の琥珀位の頃だった。今も昔も変わらず主人に誠実だった。

「坊ちやま、今回はどのような家具が欲しいのです？」

店の中を見て回っている琥珀を見て篠田が言う。

「うーん・・・カーテン付きのベッドがいいかな。寝顔、見られたくないんだ。」

笑って誤魔化しているのがバレバレな琥珀を見て、微笑みながら言った。

「近い未来、奥様と過ごすためですね？」

冗談を言っているのにも気付かず、琥珀は動揺した。そんな琥珀を見ながら篠田は、実に分かり易い主人だと思いながら反応を楽しんだ。

「ち、違つよ！僕まだ結婚する気無いし、そういう事もする気無いよー!!」

顔を赤らめながら必死に抵抗する琥珀だが、篠田は感情を顔に出さずただ微笑んでいるだけだった。

「私は何も、そこまでするのですかとは聞いていませんよ？それとも、坊ちやまがそのようにお考えで・・・？」

「むう・・・今日は帰る・・・。カーテン付きベッドはまた今度だ。」

顔を少し赤らめて不貞腐れながら店を出た。その後を、やれやれと笑いながら主人を追った。

「・・・ちゃん・・・でちゃん・・・楓ちゃん、起きて。風邪引いちやうよ?」

「んん・・・?」

楓が目を覚ますと、目の前には幹部の実花が心配そうな顔をして見ている。

「実花ちゃん……。あれ、私……。？」

周囲を見渡す途中、手に持っていた手紙に気がついた。

「とりあえず部屋に戻るう？ 曇ってきたし……。」

「うん。」

室内に入って見ると朝忙しかったメイド達の姿は無かった。恐らく各部屋の掃除に向かったのだろう。

「その手紙は何？」

「わかんない……。起きたら持ってた……。？」

四つ折りになつていた手紙を広げて読んだ。すると、楓の顔が青くなつていった。

「どうしたの？……。見せて。」

手紙を持っていた手には力が無くすぐに取る事が出来た。元に戻るうとしていた手紙をきちんと広げて、声に出して読み始めた。

「何々……。？」この度は庭掃除の後眠ってしまった、そのままの仕事放棄していた楓さんに処罰を与える事とします。食事が終わったら私の所へ連れて来て下さい。琥珀……。うわああ……。？」

楓は声にならない悲鳴を上げていた。そして絶望感に陥り、その後食事もまともに食べられなかったと言う。

流石に心配になった咲達は懸命に楓を励ましていた。

「大丈夫だよ、楓ちゃん。初めてなんだから失敗も当たり前だし、ね？」

「ううん……。初めてだからちゃんと出来ないといけないの……。だって、ここに来てすぐに処罰を受けるなんて……。しかも居眠りで仕事放棄っていう理由で……。」

生気も無く、口から魂が出ているようにも見えていた。そんな楓に、副メイド長の七海は溜め息を吐いた。

「楓、失敗なんて誰にでもあるよ。それに初めて来た時に処罰を受けたのはあんただけじゃないんだからさ。そんなに気を落とさない

で。」

「……すみません。」

他のメイド達にも励まされて、もう落ち込むのも失礼だと思い始めた頃には琥珀の仕事部屋へと向かっていた。

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせてノックをし、「どうぞ。」という声が聞こえた後に扉を開けた。中には琥珀が座っていて、楓を待ち構えていたようだった。

「やあ。よく眠れた？」

「ええ、まあ。おかげさまで……。」

やっぱりこの人といるとイライラするな…… そう思い、目をそらして次の発言を待っていた。

「で、君の処罰なんだけどね……。」

そこまで聞いた楓は、自分の体が大きな鼓動のせいで揺れている事に気づいた。白い伯爵、琥珀の屋敷で働き始めてから初めての処罰である。とても緊張していたのだ。

「君には明日の買い物に付き合ってもらおうかなと思って。」

あまりにも処罰とは言えない処罰だったので、「ふえ？」という間抜けな奇声を漏らして啞然とする。そして、思い切りホツとした。

処罰は伯爵が恐ろしいイメージがあったように、もつと酷なイメージがあったからである。だが琥珀の事なので、何かあるに違いないと油断はしないように用心した。

「明日の午後一時に行くんだ。わかったね？」

「承知致しました。」

「うん。部屋に戻っていいよ。」

笑顔で言う琥珀は何だか楓を追い出しているようにも聞こえた。「失礼しました。」とやはり怪訝そうな顔をしながら伯爵の部屋を出る。

「買い物か……。何かあるのかな？」

”買い物”と聞いても別に普通な気がしてならなかった。

処罰が買い物なんて聞いた事が無い、そう思いながら部屋に向かっ

たのだった。

買い物より食い物。花より団子じゃい・・・ちょっと違う？

ピピピピッ・・・ピピピピカチッ・・・

時計のアラームを止めた後楓は、眠そうな目をして起き上がる。髪の毛はボサボサ・・・という程でもなく、長いので整っていた。起きたらまず顔を洗い、歯を磨く。その後は着替えなどを済まし、予定を確認する。髪を梳かしながら不思議の国のアリスのデザインのスケジュール帳を見ていた楓は、初めはポーっとしていたものの【処罰・・・伯爵と買い物。午後一時から】という言葉を見つけ、それを二度三度見した。目を丸くさせ、その言葉を十秒間じっくり見ていたのだ。そして、記憶整理をした後、

「忘れてたー！！！」

こうして、楓の苦痛な一日が始まったのである。

「おはよ・・・。」

「おはよ、楓ちゃん・・・何か元気ないね。」

とてもだるそうなその挨拶に最初に応答したのは歩美だった。「どうしたの？」と顔に書いてあるので、起きてから手帳を見るまでの事柄を簡潔に話した。

「頑張れ。買い物付き添いなんて滅多に頼まれないからね。さ、

ご飯食べよ、ご飯。」

「歩美ちゃん・・・。」

話を強制終了させられ、さっさと朝飯を食べ始める歩美を見て楓はまたしても元気がなくなってしまった。

朝飯もしっかり食べ、午前中の仕事を終わらせた楓は今まで忘れていた事を一気に思い出したようだ。頭も下にきっちり九十度に下がりそうだった。そんな楓を見ながら他のメイド達は励ましながら琥

珀の元へと連れて行った。当然の事に、そんな楓を見た琥珀は何があつたのかと言うような目でメイド達を見た。

「どうしたの？」

流石に琥珀と行く買い物嫌なんだとは言えない。なので、メイド達は朝御飯が口に合わなかったと嘘をついた。そして、心の中で楓に謝っていた。

「さ、行こうか。」

「・・・はい。」

重い空気が横から流れ出しているのが気になっていたが、琥珀は気にせずに門まで歩いていった。途中、「歩きで行くからね」と話しかけてもずどーんと重い「はい・・・。」が返って来るだけだった。篠田も付き添いではあるが、いつもはよく喋るくせに楓が付き添いだからか話題を振らない。長い沈黙を破るために勇気を出して琥珀が話しかけた。

「今日は天気で良かったね。メイドを付き人にして買い物に行くのは久しぶりかな。ね、篠田さん。」

「そうでございますね、坊ちゃん。」

そしてまた暫くの沈黙。

「楓さんはこの街には詳しいんだっけ。」

既に魂が口から抜けかけている楓に応答は無かった。

琥珀は溜め息を吐き、仕方なく行き先を変える事にした。

「篠田さん、いつもの喫茶店に行き先変更ね。」

「承知いたしました。」

魂が抜けかけていた楓も顔を上げて驚いた顔をした。

「買い物はどうするんですか？」

「少しお茶にしてからね。」

と言うと楓は少し嬉しそうに微笑んだ。それを見た琥珀と篠田は安心して、喫茶店まで行った。

店の中は一般庶民も行きそうな普通の可愛らしい店だった。店の中

に入るとふわつと紅茶の香りと、ケーキの甘い香りがした。テーブルはテーブルクロス付きのお洒落なデザインであり、照明は花のよな形をしていて真に可愛らしい店だった。馬鹿力が自慢の楓もやはり女の子。目を輝かせながら店を見渡していた。その様子を見ていた琥珀は笑顔になった。

「気に入った？」

「はい、とても！」

席に着き、琥珀は会話が弾むよう自分が昔から来ていた店であり、自分の一番好きな喫茶店だと言う事を楓に話した。楓は、行く前の不安も無くなつた様子で琥珀の話の話を聞いている時ずっと笑顔でいられた。

楓はミルクティーを頼み、琥珀は今月新発売のキャラメルティーを頼んだ。

「伯爵つて意外と甘党なんですね。」

「まあね。」

幼い容姿と性格からして甘い物がよく似合っている。

紅茶が来た時にティーカップの上に小皿が乗っていて楓は驚いた。

琥珀は笑ってそれについての説明を始めた。

「香りや温度を逃がさないようにするためにあるんだよ。飲んでごらん、凄く美味しいよ。」

視線を紅茶に戻し、小皿を取り、火傷しないよう恐る恐るゆっくりとティーカップを口に運ぶ。そして、少しずつ口に含んだ。香りや味が口の中で広がっていくのがよく分かった。喉を通った後は目を見開いて、

「とても美味しいですね・・・初めてです。こんなに美味しい物をいただいたのは。」とはしゃいで言った。

琥珀はにっこりと笑い、自分も紅茶を飲み始めた。

美味しい、美味しいと言いながら飲んでいともうすっかり飲み干してしまった。一方、外で待機していた篠田はと言うと、二人が来るまでこっそりと販売機のコーヒーを一人虚しく味わっていたのだ。

そんな篠田でも意外と現代女性に”ダンディー”というイメージで人気があり、篠田がコーヒーを飲んでいる姿を写メで撮ったり、黄色い声を浴びせられたりしたそうだ。

中から二人が出てくる頃にはコーヒー缶を捨て、何事も無かったように店の横で突っ立っていた。

「さ、次から本題へ行きましょうか。楓さん、元気出てきたみたいだし。」

「はい。いろいろとありがとうございました。付き人として頑張ります！！」

琥珀もうんうんと頷いてるのを見て、篠田には和解したように見えたのだった。

「ところで伯爵、何処まで買い物に……？」

「仕立て屋に寄ろうと思ってるね。私服がもう少し欲しいんだ。」

と言っているが、既にクロゼット自体が部屋になっており、百着を超える服がその中で眠っているのであった。そんな琥珀に篠田は情を持たないで文句一つ言わずに付き合っていたのかと思うと、彼の”スルースキル”がとても発達していたと思われる。

三人が辿り着いたのは、とても品物の値段が高そうな仕立て屋だった。名前は「Beauty」。店内に入ってみると地味なのから煌びやかな服が沢山あった。その中から琥珀はシンプルなものばかり選んでいた。どれも色が淡く、琥珀の白い肌にもマッチしていた。

「楓さんも、欲しいものある？」

そう聞かれると楓は大げさに両手を左右にぶんぶん振った。

「そんな、いいですよ私は……。」

「そうかい？……じゃあ、スカーフを買ってあげる。」

それでも遠慮しがちな楓に対し、琥珀は聞く耳を持たない。そのまま篠田に渡し、レジへ運び会計までをさせた。楓が元の場所に戻そうとしたスカーフもその中に混ざっていた。

「はい。」

「うう……。」

結局拒否出来なかった自分を責める事になったのだ。

「篠田さんはこっち。楓さんはこっち。」

篠田の方は五袋ほど持たせているのに、楓にはたったの一袋だけである。これじゃ悪いと思った楓は、何とか篠田から少し分けて貰おうと、頼んでみた。だが、返って来た答えは「女性に何袋も持たせる訳には参りません。」と荷物をヒョイと楓に届かない位置まで持ち上げてしまったのだ。

「これじゃ処罰になりませんよ……。」

悲しそうな顔をしている楓を見て、琥珀は笑顔で言った。

「処罰なんて、そう重い物にする気はないからね。気にしなくていいよ。」

そう言われても何だか納得がいかない楓だった。

最後に向かったのは家具屋「Gracious」。昨日買い損なったカーテン付きベッドを買いに来たのだ。

「どうしようかな……。ねえ、楓さん。何がいいか選んでよ。」

「?!……私が……ですか?」

「うん。これは僕の命令だと思ってくれて構わないよ。」

命令となると下の者は従わなければいけない。その念に押され、ベッドのデザイン画を見ていく。そして、目に留まったのは、ベッドの上と下がアラベスク柄の柵になっている物だった。カーテンは白と金色の綺麗な模様。とても”天使のベッド”と言うに相応しい物だった。

「いいね、これ……。よし、これを注文しよう。」

と言う事で楓の選んだデザインは直ぐに採用されたのだ。

これが後に今の木造のベッドと換えられるのだった。

「今日はありがとうね。楽しんでもらえたようで嬉しかったな。」

そう言って笑うと、楓は仕立て屋の時の動作と同様、両手を左右に振った。

「いえいえ、最初は不安だったんですけど・・・伯爵が楽しませてくれたので。こちらこそありがとうございます。」  
ぺこりと歩きながらお辞儀をした。

屋敷に着き、唐突に琥珀がこんな事を言い出した。

「そうだ、今日の夕食は僕も食堂で食べようかな。」

それを聞いた時は楓も状況整理が出来なかったが、数秒後「ええええええ!!!」と叫んだ。

叫び聞いてもにっこりしているとと言う事は本気であると篠田も楓も感ずいた。

夕食時は案の定メイド達の視線は琥珀の方に集中し、「何故ここに伯爵が・・・?」と言う顔で楓の方を一齐に見た。楓は周りを見る事が出来ずに、冷や汗を流しながら俯いていた。そして、初めから終わりまでメイド達は力チ力チだったそうなの。

「今日の食堂は静かですね。何かあったんです?篠田さん。」  
と暢気に自室で夕食を食べていた雪野なのであった。

## 可愛い花には毒が付き物。毒は添付物。

昨夜疲れていたのかアラームをセットし忘れ、七時に起きた楓は屋敷の様子がおかしい事に気づいた。

いつもよりエントランスが静かなのだ。いつもだったらこの時間はもう既にメイド達がどたばたしながら掃除しているのもおかしくない時間帯である。静か過ぎて逆に恐怖を感じた楓は身震いをした。仕置きされる覚悟で、恐る恐るドアを開けてみると、エントランスは蛻の殻、誰も居ないのだ。とりあえず、大急ぎで支度をし、食堂に向かった。食堂の中からは、エントランスにはいなかったメイド達の声が聞こえるのだ。ドアに近付いて聞いてみると、何やら会議をしているようだった。キイという音を立てながらも静かに入ったが、メイド達の視線は前に立って話している雪野や七海に向いている。ホツとした楓は、食事を食べる時の席に向かった。その時、突然雪野から名前を呼ばれたのだ。

「ああ、楓さん。貴女はお客様を迎えるのは初めてでしたよね？」

一瞬ドキツとした楓だが、戸惑いながらも返事をした。

「は、はい……。お客様とは……。？」

「後で個人的に質問をしに来て下さい。詳しく教えますので。」  
雪野の代わりに七海が答えた。

雪野は横で微笑み、優しい声で「さあ、他のメイド達と一緒に話を聞きましょう。」と言った。楓はこくりと頷いて、着席した。

説明に至っては分からない事が多すぎたために、終わった後で他のメイド達が本館に行く中で一人雪野と七海の下へ向かった。

「さて、簡単に最初から説明しましょうか。」

雪野から聞いた話だと、今日の午後二時から琥珀の幼馴染である姫野綾子（めいのあやこ）が屋敷へ来るらしい。来るまでに屋敷を綺麗に掃除し、少し飾り付けをしたいのと言う。

「私のお仕事は何でしょう？」

それを聞いた二人は待つてましたと言うようににんまりと笑った。

午後二時五分前。屋敷内もすっかり綺麗に整い、迎える準備も完璧だ。後五分で到着するが、その際門には迎える人材が必要である。それに選ばれたのは楓だった。楓が来る前は交代でやっていただが、不審者らしき者が訪ねて来る時に対処出来ずに居た例がある。それに篠田は琥珀の世話をするのに忙しい。そのため、メイド達の中で最も力がある楓に頼んだのだ。そう、この間あった食堂事件がそれに関連する。仕事はただ単に門番と送迎をするだけである。これを聞くだけでは、「何だ、簡単じゃないか。」と思う者も居ると思うが、とても大変である。

まず、午前七時半から午後二時までずっと突っ立ってなければいけない。それだけではない。大半は男の不審者が度々訪れるのだ。楓が初めてやる仕事にも関わらず、一時間ごとに一人ずつ来るのだ。それも分かり易いサングラスにマスク、丸型ニット帽と言う格好でやって来る。その度に楓は凄まじい顔で睨んだり、ボクサーの如く殴ったり蹴ったりして何とか追い払ったのだ。

「ふう・・・今日晴れてて良かった・・・」  
そう言っている傍から天候が怪しくなってきた。雲の流れが異様に速く、今にも雨が降りそうである。その時、楓の前に一台の車が停まった。もしやと思い車に近付いてみると、運転席には若い執事、後ろの席にはフランス人形のような可愛らしい少女が座っていた。少女は楓に気付きにこつと微笑んで見せた。

「姫野様でいらっしやいますか？」

「はい。」

本人だと分かった瞬間ホツとして、表情が綻んだ。

執事の方は車から出ていて、予想もしていなかった言葉が執事の口から出た。

「退いて下さい。御嬢様の邪魔です。」

空耳か、聞き間違えかと一瞬目をぱちくりさせた楓に執事の目付きは段々キツくなる。恐ろしくなった楓は言われた通りに退こうとしたが、綾子は反対側から出ていた。

「いいですよ。邪魔なんて言わないで下さい、優斗。」

「・・・失礼致しました。」

口では謝っているが表情には反省の色が全く無かった。

「すみません、うちの執事が。改めまして、姫野綾子です。こちらは執事の本田裕本田よく見ると初めて見る顔ですね。」

「最近入ったばかりの楓と申します。以後お見知り置きを。」  
と軽い挨拶を挨拶をした後屋敷に入った。

その間、琥珀の部屋では琥珀が綾子に会いたくないと駄々をこねて部屋を出ようとしなかったのだ。

「やだよ。会いたくない・・・。」

「あら、前まではあんなに仲良く遊んでいらっしやっただのに。」  
それを聞いて不貞腐れる琥珀は、ボソツと呟いた。

「・・・あの執事が嫌なんだ。」

そう言つと何やら篠田が雪野とコンタクトを取っていた。

「私目がどうにか致しますので。どうか、綾子様に御会いして下さい。」

琥珀は数秒考えた後、首を縦に振った。それをみた篠田と雪野は顔を合わせて琥珀の方に向き直りにこつと微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8818y/>

---

メイドさんの出番です!!

2011年12月1日22時01分発行